東海古代研究会　令和七年

東海の古代

第299号　2025年7月

会長　：　宮澤健二
編集　：　石田泉城　　投稿先アドレス：toukaikodai@yahoo.co.jp
ＨＰ　：　http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm

「東海古代研究会」の新会長・役員が決定

令和７年６月15日の総会において、次のとおり新会長・役員が出席者全員の賛成で選出されました。任期は、令和８年度の総会の終了の時をもって満了とします。

会　長（古代史ｾﾐﾅｰ担当）	宮澤 健二（小牧市）
副会長（兼事務局長）	石田 泉城（名古屋市）
理　事（会計担当）	田沢 正晴（名古屋市）
理　事（ｻﾏｰｾﾐﾅｰ担当）	大島 秀雄（東海市）
理　事	酒井　誠　（刈谷市）
監　事	横田 幸男（大阪市）

＊＊

会長就任のごあいさつ

東海古代研究会 会長　宮澤健二

畑田壽一・前会長のご逝去にともない、奇しくも会長に就任いたしましたので、一言ごあいさつ申し上げます。

私は中学生時代に古田武彦氏の処女作『「邪馬台国」はなかった』と出会い、その中で「定説」を実証的かつ大胆に打ち砕く痛快さを目の当たりにし、古代史に引き込まれていきました。そのご縁が、半世紀近い歳月を経て、本会への加入に繋がりました。

近年の年刊論集『古代に真実を求めて』において、後継の諸氏が古田氏の論点を整理し、当時は未発見の史料や科学的知見を綿密に吟味し、新しいピースを一つずつ追加する地道な研究を続けておられるのには、強い期待とともに、頭が下がる思いがいたします。

本会は、古田氏の史料批判の姿勢や学問的態度に敬意を払いつつも、内容的には会員各自が関心を持つ幅広い事柄を談論風発的に議論し、収束的とはまいりませんが、自分の関心事を深める活力を得て再会を期すという運営を行っています。前会長の足下にも及ばぬ浅学の身ではございますが、真実を求める姿勢を強く持ち、積極的に議論に加わることにより、責務の一端を果たすつもりでございますので、よろしくお願い申し上げます。

『神話』の世界

名古屋市　石田 泉城

1　神話とは

神話は、『古事記』や『日本書紀』（以下、記紀）の神代に記された現実の話とは思えない物語で、明らかに実際の歴史とは違います。ただ、一方で、神話は歴史的な出来事が反映された伝承とする考えもあり、その内容には様々な解釈の可能性があります。細部に拘らず大筋だけを眺めれば、古代には何が起きたのか、その一端を伺い知ることができます。

2　神話の内容

記紀の神話には、内容にずれがあります。たとえば「因幡の白うさぎ」は『古事記』には記されていますが『日本書紀』には書かれていません。

『日本書紀』より『古事記』の神話の方が充実し、使用されている漢字が読みやすいのが特徴です。神話は、天地の創世から始まり、大八島国の生成のほか、天の岩屋戸や八俣大蛇（以下、ヤマタノオロチ）などの説話がよく知られており、神話のおよそ三分の一が「出雲神話」とされます。

3　須佐之男命の大蛇退治

(1) 記紀に基づく通説

『古事記』のヤマタノオロチ退治の冒頭には、須佐之男命（以下、スサノオ）が高天原から追放された後に「**降出雲國之肥上河上、名鳥髪地**」（**出雲の国の肥の河上、名は鳥髪という地に降る**）と記され出雲の国名がでており、出雲を舞台にした話です。『古事記』の神話では「出雲」が９回登場し、出雲地方は神話の重要な場所であったようです。

「**肥上河**」は小さな文字で「上」が書かれていますが、これは「肥」の文字を尻上がりに高く発音する上声の声調で読むことを示した声注とされます。

このことから「**肥上河**」は「出雲大川」とも呼ばれる出雲を象徴する斐伊川と考えられています。

また、この「鳥髪地」を鳥髪山とすると、『出雲国風土記』においては、鳥髪山は、斐伊川の上にあると記されていることから、斐伊川の上流にある船通山（標高1142m）と思われ、山頂には天 叢 雲 剣出 顕の碑が立てられています。

(2)「出雲神話」は無いとする考え

スサノオのヤマタノオロチ退治を「出雲神話」の一つとする通説に対して、文学研究者

の矢嶋泉青山学院大学名誉教授（1950年～）や沖森卓也立教大学教授（1952年～）のように、出雲には強大な力を持った勢力がないことを理由に「出雲神話」は無いと主張する学者もいます。また、家永三郎東京教育大学名誉教授（1913～2002年）のようにすべての神話を否定する学者もいました。

(3) 須佐之男命と櫛名田比賣

『古事記』によれば、高天原から降臨したスサノオは、大山津見神の娘である、櫛名田比賣との結婚を条件に、ヤマタノオロチ退治を行います。これは、斐伊川の氾濫を防いだことを指すのかも知れません。現在で言うところの防災工事です。

中世以降の斐伊川は、氾濫を繰り返す暴れ川だったと知られていますが、ただ、弥生時代においては、斐伊川下流の出雲平野に位置する中野美保遺跡や青木遺跡などでは、洪水被害を頻繁に受けてはいないとの研究結果があります。また、宍道湖の湖底のボーリングによる花粉調査によれば、6000年前頃から500年前頃までの斐伊川流域の山地にはカシ・シイ類からなる照葉樹林が広がっていたと推定され、森林による流量の調整機能が働いていたようで、斐伊川は、比較的穏やかな川であったとする研究もあります。

４　記紀と異なる『出雲国風土記』の地元伝承

『出雲国風土記』には、ヤマタノオロチ伝説は登場しませんが、この伝説と類似の「越八口」を退治する記述があります。

・意宇郡・拝志郷の条

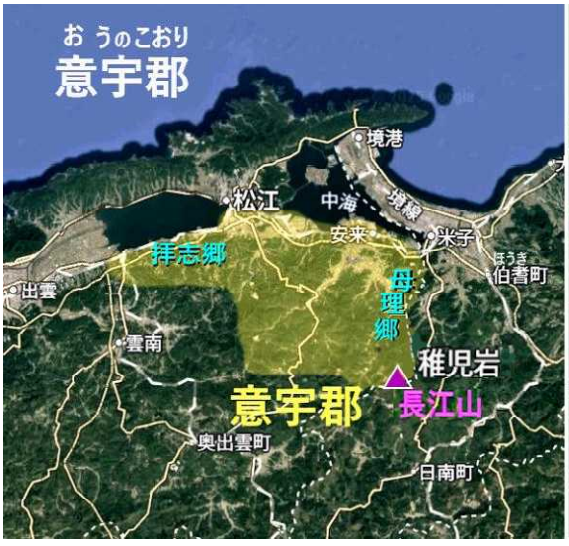
天の下造らしし大神命、越八口を平けむとして幸しし時、此処の樹林茂り盛りき。

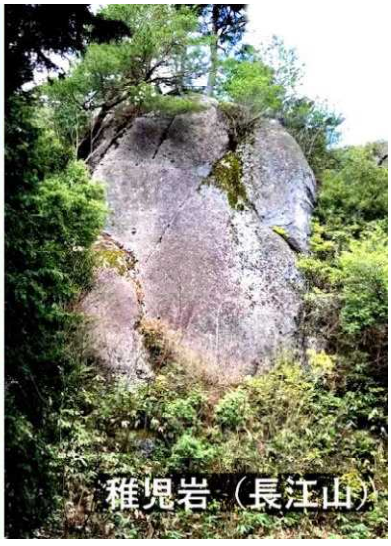
・意宇郡・母理郷の条

天の下造らしし大神の大穴持命、越八口を平け賜ひて、還りましし時、長江山に来まして詔りたまひしく、「我が造りまして、命らす国は、皇孫命、平けくみ世知らせと依さしまつらむ。但、八雲立つ出雲国は、我が静まります国と青垣山廻らし賜ひて、玉珍置き賜ひて守らむ」と詔りたまひき。

ここでは主人公である「**天の下造らしし大神**」がスサノオではなく大穴持命（以下オオナムチ）となっており、その内容は「越八口」を平定する前と後のことを記しています。

母理郷の条に記された「長江山」は、永江山とも記され島根県安来市（旧・伯太町）にある山（570m）です。





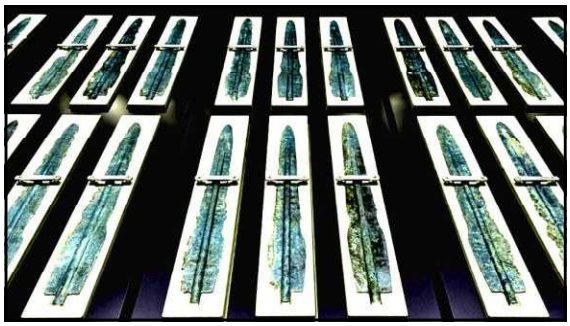
天下を造った大神であるオオナムチ（大国主命）が越八口の平定から帰ってきて、長江山を訪れて、「**私が造り、平定してきた国々は皇孫（天皇の子孫）が平定したと世に知らせようとも、ただ、この八雲立つ出雲だけは、私が鎮座する国として青垣の山を巡らせ神宝の玉を置いて守ろうとおっしゃった**」（泉城による）とあります。

『出雲国風土記』によれば、出雲における本来のヤマタノオロチ伝説は、あくまでオオナムチによる越八口の平定であり『記紀』では、それをスサノオの神話にしたのでしょう。

５　出雲における考古学的な大発見

神話をそのまま歴史的事実と捉える人は多くないと思います。しかし、近年出雲地方では、これまでの常識を覆す考古学的な大発見が続き、神話と考古学的事実は重なり合っていることから、出雲には強大な勢力があったと認識されつつあります。

(1) 荒神谷遺跡



1984年に島根県加茂町の荒神谷遺跡から、358本の銅矛（銅剣）や16本の銅戈、６個の銅鐸が出土しています。また、近くの加茂岩倉遺跡からは39個の銅鐸が出土しています。これまで発見されてきた銅器の量を上回る大量の銅器の発見です。

(2) 妻木晩田遺跡

1995～1998年には鳥取県西伯郡大山町と米子市淀江町にまたがる弥生時代の大規模な集落遺跡が発掘されています。遺跡の面積は170haで約900棟の建物跡や四隅突出墳丘墓を含み24基の墳丘墓が見つかっています。

(3) 四隅突出墳丘墓

1953年には、西谷墳墓群（出雲市）や仲仙寺古墳群（安来市）などからヒトデの形をした山陰地方特有の四隅突出墳丘墓が発見されており、これを含めて多数の墳墓が発見されています。

６　まとめに代えて

スサノオがヤマタノオロチの尾を切ったとき、尾のなかから出てきたとされる**天叢雲剣（草薙剣）**は、現在、名古屋の熱田神宮の神宝になっています。神話が身近なものに思えてきます。

現在の日本では、漫画やアニメなどで神話に触れる機会が多々あります。その中には、神話を素材にして、また違った娯楽作品として提供され大いに興味を惹きますが、戦後のGHQの主導により、神話は日本の国民のナショナリズムを昂揚するものとして禁止され、学校教育では神話を教えられることはほとんどなくなったために、日本では本来の神話がどうであるのかは伝わっていないと思われます。ところが、欧米などでは、その国の神話を教えています。それは、神話がその国民のアイデンティティや価値観を形成するために重要な要素だからです。

歴史学者の津田左右吉早稲田大学教授（1873～1961年）は、神話について史実としての材料とはいえないが、本文を誠実に読み取ることが必要とされました。古代の人々がどんな考えを持って神話を語り伝えようとしていたのか関心を持つ契機になれば幸いです。

『古事記』の国生み神話の謎

名古屋市　田沢 正晴

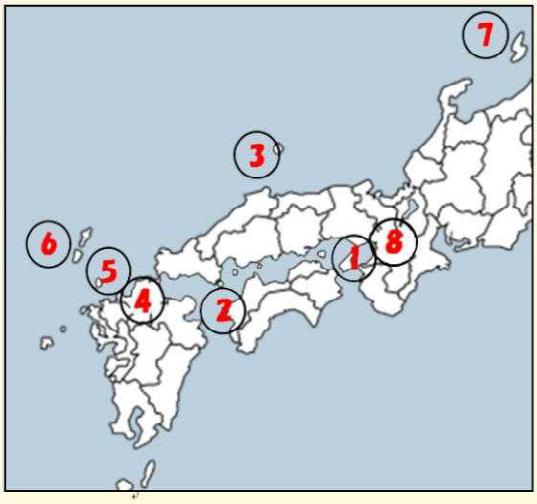
１．はじめに

日本最古の書物である『古事記』、『日本書紀』と聞いて、何を最初に思いつくかは人それぞれだろうが、ヤマタノオロチや因幡の白うさぎ、国生みなどの神話は誰もが知っている身近な説話だろう。この中で、『古事記』の冒頭を飾るのが国生み神話である。

国生みと言うのは、イザナギとイザナミの二神が高天原の神々に命じられ、大八島すなわち日本列島を構成する島々を創り出した神話的物語である。『古事記』にも『日本書紀』

にも国生み神話は描かれているが、『古事記』の大八島（８島）を下記に示す。

No.	古事記の国生み（生まれた順）	現在の地名
1	淡道之穂之狭別島（あわじのほのさわけのしま）	淡路島
2	伊予之二名島（いよのふたなのしま）	**四国** ？
3	隠伎之三子島（おきのみつごのしま）	隠岐島
4	筑紫島（つくしのしま）	**九州** ？
5	伊伎島（いきのしま）	壱岐島
6	津島（つしま）	対馬
7	佐度島（さどのしま）	佐渡島
8	大倭豊秋津島（おおやまととよあきつしま）	**本州** ？



２．８つの島に感じる違和感

これを見て疑問がいくつか浮かんでくる。まず、小さい５つの島と、本州・四国・九州の主要な３島がいかにも大きさ的に、アンバランス過ぎることである。

『古事記』には、イザナギ・イザナミが、混沌とした大地を天沼矛（あめのぬぼこ）で「コオロコオロ」とかき回すと、矛先から滴り落ちた塩の雫が固まってオノゴロ島ができたと記されている。そのあと二神は８島（大八島）を生み出していくことになるのだが、小さい５島は理解できても、大きい３島はとても「出産」のイメージには結びつかない。

そこで、通説では本州とされる大倭豊秋津島（おおやまととよあきつしま）を、例えば豊（大分県）の秋津島と見ることにしよう。断然この方が感覚的に理解しやすくなる。調べてみると大分県国東市の大分空港近くには「安岐」町が存在する。平安時代中期の辞書、『倭名類聚抄』（以下和名抄）にも豊後国国埼郡に「阿岐」郷の地名がある。津は港であるので、秋津は阿岐津と見て良いだろう。古田武彦昭和薬科大学教授（1926年～2015年）も『盗まれた神話』（1975年）でこの説を主張されている。『古事記』の編者は、豊（大分県）の小さな島に恣意的に「大倭（おおやまと）」をつけて本州島に見せかけたような気配を感じる。（『日本書紀』には「大日本豊秋津洲」と記されている。）

同様に、四国も見てみよう。通説では伊予之二名島を四国としているが、愛媛県伊予郡松前町に恵依彌二名（えひめふたな）神社があって、古田武彦氏はこの地を二名島に比定されている。しかし、ここは島らしさがない。私は同じ愛媛県の佐田岬半島の中ほどに二名津という地名があって、こちらの方が島らしく見えるのでこちらを推したい。しかも、二名と安岐は豊後水道を挟んでわずか30kmの距離であり、何らかの結びつきさえ感じられる。

本州とされた秋津島も、四国とされた二名島も、大きすぎない程度の島が見つかった。８島のうちで最後に残ったのが筑紫島である。これだけはいくら探し回っても、その名前からは適当な大きさの島が見つからない。筑紫を九州全体とはせず、福岡県に限ったとしても淡路島などの島と比べて大きすぎる。では、何故筑紫がここに紛れ込んだのか、その疑問を解く鍵はないのだろうか。

３．四国・九州・本州の「島」が改変された理由

一つ考えられるのは、早くて５世紀と思われる原初の国生み伝説を、『古事記』の編纂者である太安万侶が８世紀に改変した可能性である。伊予之二名島を四国とし、筑紫島を九州として説明している『古事記』の記述の中に次の記事があり、これが改変もしくは追記した形跡と考えられるのだ。

◇ 伊予之二名島は、身(胴体)が１つで面(顔)が４つある。面のそれぞれに名がある。
愛比売（えひめ） － 伊予国
飯依比古（いいよりひこ） － 讃岐国
大宜都比売（おおげつひめ） － 粟(阿波)国
建依別（たけよりわけ） － 土左(土佐)国

◇ 筑紫島は、身(胴体)が１つで面(顔)が４つある。面のそれぞれに名がある。
白日別（しらひわけ） － 筑紫国
豊日別（とよひわけ） － 豊国
建日向日豊久士比泥別（たけひむかひとよくじひねわけ） － 肥国
建日別（たけひわけ） － 熊曽国

『古事記』は、712年に完成しているが、その元となる数多くの歴史書や各地の言い伝えがあったとされる。６世紀半ばに書かれ、稗田阿礼が暗誦（習得）した『帝紀』と『旧辞』などの原典を、８世紀に太安万侶が最終的に編纂するまでには、その途中で書き換えられたり追加された部分もあったに違いない。現に『古事記』と『日本書紀』の違いは各所にある。書き換えの目的は、712年時点の権力者が国家統一という目的を持っていたので、それに忖度（そんたく）することもあれば、712年当時の知識、常識に置き換えて読み手の便宜を図ることもあったと思われる。

４．筑紫の謎

筑紫が『古事記』の編纂者によって改変（後付け）された形跡を見てきたが、それでもなお、唯一筑紫だけは「小島らしくない」という不自然さが消えない。九州内だけでなく日本列島を探しても筑紫（つくし）という地名から適当な大きさの島は見つけることはできなかった。ということは列島になかったのかも知れない。ではどこにあったのか。

朝鮮半島南部の加耶には紀元前から倭人がいたことが、３世紀の倭国を描いた『魏志』倭人伝に書かれていて「**到其北岸狗邪韓國**」とある。「その北岸」はもちろん倭の北岸である。さらに、４世紀後半の朝鮮半島の様子が石板に刻まれた好太王碑にも、倭が何回も登場する。512年に倭が半島南西部の任那四県を百済へ割譲するまでは、確かに倭は半島に勢力を持っていたのである。その半島南西部には前方後円形の古墳10数基が分布している。

これらのことから、『古事記』の原典が書かれた５世紀には、朝鮮半島南部に倭の拠点があったことは間違いないので、大八島の「筑紫」はもともと半島南部の島の名が書かれていたとする仮説も一考に値する。

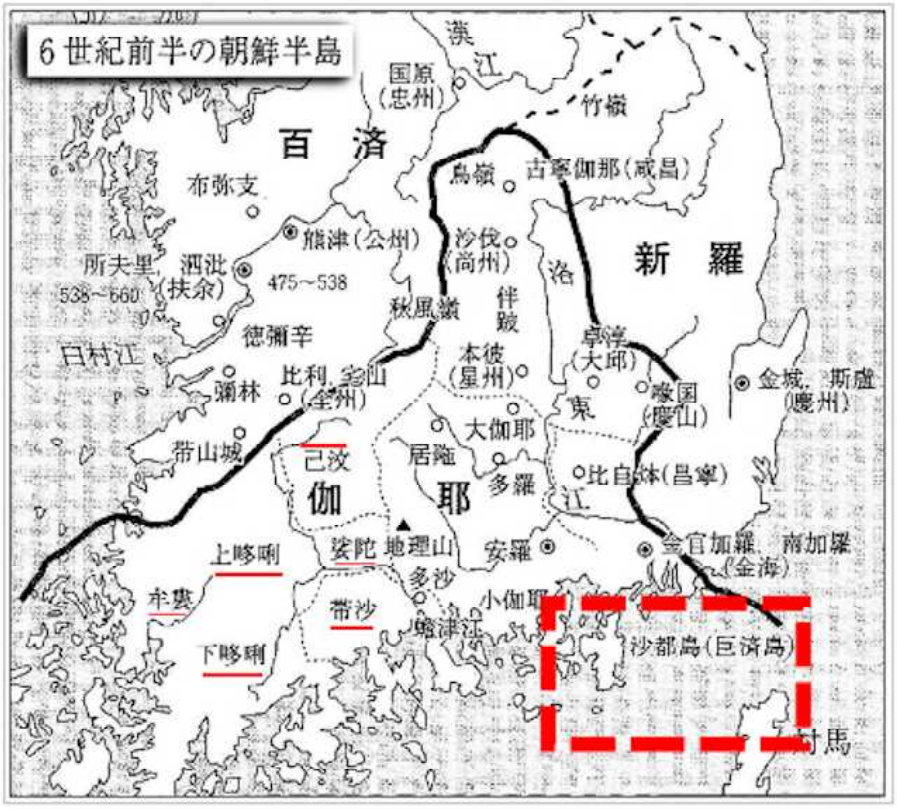
５，韓国巨済島（沙都島）

このように筑紫島を朝鮮半島に探していた丁度そのとき、東海古代研究会の宮澤健二会長から貴重な助言を頂いた。釜山の南西に位置し、韓国で2番目に大きな島である巨済島は、６世紀には沙都島と呼ばれていたとの情報である。

その根拠となるのが『日本書紀』継体紀9年（515年）2月条の記事である。そこには、

「物部連が沙都島に着くと伴跛人（加耶の一国または大加耶国）が残虐をほしいままにしているというので、物部連は水軍五百を率いて帯沙江（帯沙は512年百済に割譲した4県の1県）に向かった。」と記されており、そこには確かに「**沙都島**」が現れる。

『古事記』の原典が書かれたであろう５世紀に、朝鮮半島南部に倭の拠点「**沙都島**」があったのであれば、沙都島は時を経て佐度島に変化したか、後の時代に書き変えられたかのどちらかということになる。どちらにしても、筑紫ではなく佐渡が朝鮮半島の拠点だったのだ。その場合、筑紫島はやはり九州の一地域と言うことになる。



（図は、篠川賢「飛鳥と古代国家」（吉川弘文館）から引用）

以上をまとめると、原典が書かれた当初は小さい島だった3島は、8世紀になって「四国、九州、本州も島である」ことが広く認識されるに及んで、『古事記』の編纂者によって次の表のとおり改変されたとの結論となる。もしそうであれば、小さい5島と大きい3島のアンバランス感は気持ちよく解消される。

古事記の記述		原典（想定）	
伊予之二名島	四国	伊予之二名島	佐田岬半島
大倭豊秋津島	本州	豊秋津島	国東半島
佐度島	佐渡島	沙都島	韓国巨済島

６．淡路島が８島の先頭にきた理由

さて、国生み神話の疑問点に話を戻すことにしよう。『古事記』や『日本書紀』に表れる神話の世界には、出雲や九州での出来事が多く描かれている。ところが、国生みの８島で最初に出てくるのは、出雲でも九州でもなく淡路島である。この謎について考えてみよう。

『古事記』には、イザナギ・イザナミが、混沌とした大地をかき回すと、矛先から滴り落ちた塩の雫が固まって島ができたと記されている。落ちた塩の雫からオノゴロ島が生まれた描写は、淡路島にいた海人（あま）族の塩づくりの様子に重なると言われる（岡田精

司三重大学教授)。このことが『古事記』の国生み神話において、淡路島が大八島の初っ端に来た理由の一つではないだろうか。

淡路島の海人族と言っても聞きなれないと思うが、『日本書紀』仁徳天皇即位前紀に「淡路の海人」、履中天皇即位前紀に430年頃の出来事として「淡路の能嶋の海人」の記載があって確かに存在している。しかも、製塩だけでなく航海術、製鉄技術にも長けていたことも知られている。

これを淡路島の遺跡で確認しよう。

まず、特筆すべきは淡路島には前方後円墳が存在しないことだろう。前方後円墳は３世紀中頃に出現し、７世紀に造られなくなった。その数は全国で約4,800基とも約5,200基ともいわれる。南は鹿児島県大隅半島中部、北は岩手県南部に見られ、離島の対馬、壱岐、隠岐などにも存在する。ところが、これまでのところ淡路では、その存在が確認されていない。しかし、今年４月に佐渡で初めて前方後円墳が見つかっているので、今後淡路島で前方後円墳が発見される可能性もある。

一方、淡路島内の五斗長垣内遺跡では１～２世紀の鉄器生産工房が確認されている。弥生時代の鉄器生産遺跡としては、最大規模と言われているが、住居として使われた竪穴建物は少なく、鉄器製作に特化した特異な遺跡である。さらに、二ツ石戎ノ前遺跡では徳島産の辰砂（水銀朱）を原材料として朱をつくっていたとされる工房跡や、使用した工具類が発見されている。

高度な製鉄技術や朱の精製技術を持ちながら前方後円墳が見られないのは、その支配層が「海人」であるためだろう。絶えず海上移動を繰り返すため、島内に本拠を置くことはない。そのため前方後円墳は設ける必要がなかったと考えるとすべて筋が通る。

そして、海人族の持つ最先端技術（製鉄・朱）をヤマト王権が必要としたからこそ、海人族に敬意を表して淡路島を８島の先頭に置いたと考えたい。

７．まとめ　（加耶から淡路へ一本道）

私は、『古事記』、『日本書紀』に描かれた神話のルーツは、朝鮮半島南部の加耶にあると考えている。天孫降臨神話は、邇邇芸命が、葦原の中津国を治めるために、高天原から竺紫の日向の高千穂の久士布流多気（クシフル岳）へ天降ったことであるとされている。このことは神話学者の三品彰英大谷大学教授（1902～1971年）も「朝鮮の史書『三国遺事』が引用する『駕洛国記』に見られる、加耶の始祖首露王が亀旨（クジ）峰に天降る話と似ている」と指摘している。

原書が失われているので確認のしようがないが、ここまでのロジカルな論考を踏まえると、大きさでも順序でもまとまりがなかった８つの島（大八島）は、実際はヤマト王権から近い順に、淡路、伊予、豊、壱岐、対馬、最後に加耶と、すっきりした一本道に並んでいたと考えると説得力が増す。言い換えれば、今我々が目にする記紀は、大八島を「日本列島の成り立ちの歴史」として説明しているが、記紀の原書が書かれた当初は、自分たちの祖先が5世紀初頭に加耶を出発し、九州北部を経て近畿に辿り着いたという「東遷の歴史」を、国生み神話を用いて説明していることが分かる。

日向神話の舞台を探る

東海市　大島 秀雄

１．はじめに

天孫降臨などの記紀神話に出てくる地名の比定は、どこを舞台にした物語なのかを解明することにつながる訳ですが、本年４月に某文化センターの講座「日本書紀を読む_神代紀にみえる日向」（講師は神戸大学の古市晃氏）を受講した結果、物語の情報源が誰であったのかがポイントのような感じを受けましたので、講座の内容を参考にしつつ感想などを述べてみたいと思います。

２．日向の小戸の橘の檍原

そもそも古代律令国家の「日向国」は西暦684年から696年までの間に成立したものと考えられており、薩摩、大隅を含む南部九州の広大な領域であったものが、702年に薩摩が、713年に大隅が分離したものです。

檍原（『古事記』では阿波岐原）はイザナギノ尊が黄泉国に行って受けた穢れをはらうために禊の儀式を行った場所であると共に、住吉三神（底筒男命、中筒男命、表筒男命）や阿曇連が祀る三神（底津少童命、中津少童命、表津少童命）の起源譚になった場所でもあります。

檍原は海洋神出現の地であり、日向は海人集団の活動拠点として把握されていたとし、物語の情報源は阿曇連氏ではないかとするのが古市氏の見立てです。

それは『日本書紀』応神13年条一云にある日向の諸県君牛が髪長媛を奉る鹿子水門の伝承が日向の船団の存在を想定させることや、『類従三代格』延暦15年（796年）11月21日付太政官符に日向の兵衛や采女の物資を船で運ぶことが規定されていることが根拠です。

その船団の船を係留する場所が日向灘に面する一ツ葉海岸によりかつて形成されていたラグーンであり、明治37年発行の５万分の1地形図でも痕跡が確認できますので、檍原は宮崎県大淀川河口部付近の宮崎市阿波岐原町に比定されます。

また、阿曇連氏の本拠地である難波の安曇江も同様にラグーンだったのではないでしょうか。

なお、阿波岐原町には式内社の江田神社（祭神はイザナギノ尊とイザナミノ尊）があり、宮崎市鶴島3丁目にある小戸神社（主祭神はイザナギノ大神）はかつて阿波岐原町域にあったとされ、宮崎市内には「橘通」の地名も残っています。

３．日向の高千穂峰

天孫のニニギノ尊が降臨した高千穂峰の比定地については、古来宮崎県西臼杵郡高千穂町（知鋪郷）の二上山や国見ヶ丘とする説と、霧島連峰とする説が主流です。

前者は、「チホ」という地名や『日向国風土記』逸文の知鋪郷の項に高千穂の二上の峰に天孫降臨した記述を根拠にしたもので、後者は、『日本書紀』九段本文や一書四、六の「日向の襲の高千穂」という記述から景行天皇の熊襲征討伝承は九州南部の八代・球磨・諸県以南が一括して熊襲（曽）国として認識されていたので、このような表記になったとする説がもっともらしいです。

日向国臼杵郡には英多（あがた）郡（延岡市南部）があり、地名の由来が県主の居所であったことによるとされ、古市氏は古くから王権と結びついていた県主氏族が、前者の物語の情報源ではないかとされています

また『日本書紀』九段一書四の「二上峯」という記述に注目すれば、東西に峯があって

相対する山容と一致していることから、霧島連峰の日向国諸県郡と大隅国曽於郡（今の宮崎県・鹿児島県の県境）に跨る韓国（からくに）岳に比定する説が有力ではないかと考えます。

こちらの情報源は諸県君とも考えられますが、同じような所伝が日向の南北２ヶ所に存在し、『日本書紀』の編者は神話全体の構成上、天孫降臨神話は「日向の襲の高千穂」に軍配を上げて本文に記述したものであり、鎌倉中期の著作である『塵袋』の、「風土記ノ心ニヨラバ、皇祖裒能ノ忍者（ホノノヲシキノ）命、日向ノ国贈於郡高茅穂ノ槵生（クシフノ）峯ニアマクダリマシテ」の記述を重視すれば、それは槵生峯に比定されると考えた方が素直ではないでしょうか。

宮崎県小林市の『小林誌』によれば、韓国岳の「小林側になる北東の山懐に栗生（クリハエ）と呼ぶ所がある」と記されており、この栗生は槵生峯を連想させます。

また、『日本書紀』の景行紀18年条の天皇が巡行した夷守とは韓国岳の東に位置する小林市の夷守岳周辺でしょうし、群衆が集まった岩瀬川のほとりとは今でも小林市域を流れている岩瀬川の周辺なので、この景行紀の記事と天孫降臨の地が同じ地域を題材にした内容であるのは興味深いことです。

４．吾田の長屋の笠狭岬

吾田の長屋の笠狭岬はニニギノ尊が鹿葦津姫（別名：神吾田津姫、木花開耶姫）と出会いヒコホホデミノ尊が生まれ、その後裔としてウガヤフキアエズノ尊－神武と続いた場所であり、比定地は鹿児島県南さつま市笠沙町の野間岬です。

この物語の情報源としては阿多隼人（薩摩国阿多郡）や加士伎県主（姶良市加治木町か）が考えられます。

また、鹿葦津姫は大山祇神の子であり、『伊予国風土記』逸文によれば大山祇神は仁徳天皇の時代に百済から摂津の御嶋（三島）に渡ってきた神とされていますので、摂津に来る前には日向にいた可能性があり、前項の韓国岳の名前の由来に関係するのかもしれません。

『新撰姓氏録』和泉国神別には韓国（からくに）連氏が見え、韓国に遣わされて復命の日に韓国連の姓を賜ったとの記述がありますが、実態はそうではなくて、韓国連氏は大阪の陶邑窯跡群内の和泉郡池田郷（和泉市中央部）に居住していたとされますから、元々は須恵器の工人として渡来して来たのでしょう。

この韓国連氏も和泉に来る前は大山祇命と共に日向にいた可能性があり、韓国岳周辺の地域を韓国と称し、後に韓国をウジ名としたのかもしれません。

すなわち、『塵袋』に、「日向国ニ韓槵生村トイフ所アリトカキ、コノ所ニ木槵子ノ木ノオヒタリケルカ、如何。」とあり、続けて「昔シ、帒瑳武別ト云ケル人、韓国ニワタリテ、此ノ栗ヲトリテカエリテ、ウヘタリ。此ノ故ニ槵生村トハ云フナリ。」と、また「風土記云、俗語、謂レ栗為二区児一。然則韓槵生村ト云フ者、蓋云二韓栗林一歟ト云ヘリ。」との記述があり、この韓槵生村は前項の『塵袋』の槵生峯に関係した村名と思われますので、韓槵生村が韓国連氏のウジ名と対応しそうだからです。

そうであれば、『古事記』の記す天孫降臨の山が「韓国に向かい」というのは、韓国岳であった可能性が大です。

５．日向の神代山陵

以下に『延喜式』の山陵とその比定地を整理しておきます。

・ニニギノ尊：日向埃山陵（『日本書紀』：可愛山陵）－鹿児島県薩摩川内市、宮内町

・ヒコホホデミノ尊：日向高屋山上陵－鹿児島県霧島市溝辺町

・ウガヤフキアエズノ尊：日向吾平山上陵－鹿児島県鹿屋市吾平町

６．日向の古墳

宮崎県の西都原古墳群は３世紀末から７世紀にかけての築造で、古墳群の中の５世紀前半に築造の女狭穂塚古墳は全長176ｍの九州最大の前方後円墳で、履中天皇陵の２分の１、応神天皇陵の５分の３の規模を誇ります。

また、鹿児島県肝属郡の唐仁古墳群は5世紀の築造で、古墳群の中の唐仁大塚古墳は全長140ｍの前方後円墳で、九州3位の規模です。

これら２つの古墳群の豪族らは5世紀には王権と同盟関係にあったとされますので、地方豪族達の所伝が海人の舟で豪族の子弟である舎人や采女らによって運ばれ、王権にもたらされたというのが古市氏の見立てであろうと思われます。

７．筑前・高祖山付近と日向神話

『筑前国風土記』逸文や『筑前国続風土記』、地誌、国史に筑前に関連した天孫降臨などの神話情報が見当たらないこと、また、『日本書紀』神功皇后摂政前紀に「日向国の橘小門の水底にいて、海藻のように若々しく生命に満ちている神、名は表筒男・中筒男・底筒男の神がいます。」とあり、日向国と明記していることから、高祖山付近に日向山や日向峠があることを主たる根拠に日向神話の舞台が筑前にあったとして話を展開するのは無理があります。

８．おわりに

本稿の結論は通説から逸脱するものではありませんが、日向神話の舞台を南九州に設定したのは間違いないでしょう。

記紀神話は地方豪族の所伝を利用して王権中心の物語として作成したものであり、『日本書紀』に存在する多数の「一書」は、編纂の過程で何度も書き直した中間の結果を正直に掲載している可能性があります。

そのような次第なので、記紀神話の内容そのものは史実とかけ離れたものであり、歴史研究の対象とするにはあまりふさわしくなく、従って神話の内容の一字一句を厳密に解釈する必要は無いと思いますが、神話が出来上がる過程の一端を探るという意味で文化センターの講座内容は価値があったのではないかと思います。

卑弥呼はヒミヲと訓む(1)

吉川市　堀口 啓一

１　卑弥呼は何と訓むのか？

『三国志』の『魏志』倭人伝に登場する卑弥呼と言う人物は、倭語で何と訓めば良いのであろうか？

現在は音読みでヒミコと訓まれているが、三世紀の時点では呉音や漢音と言った訓み方は存在していない(使われていない)訳で、日本語の音読みで訓んでしまうと三世紀において話されていた訓み方とは乖離している懸念が生じる。

これに対し、私は漢語の表音に則りヒミヲと訓むのが正しいと考えている。漢字の表音は『新漢和大字典 普及版』(藤堂明保・加納喜光編集、株式会社Gakken、2005年)の字典を参考にしている。他の論者の研究成果等もあるが、本論攷はこの字典に基くとどのような訓み方となるのかと言う一論である。この字典に拠って論を進めるが、別の研究成果に

拠る場合は別の訓み方に至る可能性もある。

２　三国時代および西晋朝の漢語の表音

『魏志』倭人伝は西晋朝で編纂されたものであり、編纂に利用した史料は魏王朝の時に残された記録なので、『魏志』倭人伝に記録されている名称の漢語表音は魏王朝の頃の表音が使われている事になる。では魏王朝の頃の漢語表音を調べれば良いと言う事になるが、実はこれは中々難しいようだ。何故かと言うと、魏王朝から西晋朝の時代は漢語の上古音と中古音の恰度境界の時代となっていて、どちらの漢語表音が使われていたのか(あるいはどの地方の表音が使われていたのか)を特定するのが難しいのである[*1]。

例えば長田夏樹氏は洛陽古音であると主張している[*2]が、これは非とすべきであろう。来倭した梯儁・張政がどこの出身であったかは不明であるが、倭国との外交折衝担当は楽浪郡(後に帯方郡が担当)であるから、派遣された魏使随行員群は帯方郡もしくは楽浪郡出身であったと見るべきであり、魏使が会話で使っていたのは帯方郡音・楽浪郡音であった筈である。帯方郡は遼東郡の公孫淵が治めていた時期もあるので、魏使は遼東郡出身であったかも知れない。その場合は遼東郡音と言う事になる。帯方・楽浪・遼東各郡は幽州に属していたので幽州音(幽州での発音なので幽州音と提言したい)と言っても良いが、これは漢語の中古音に近い北方音に属する表音かも知れない。幽州の表音が他領域と異なるらしい事は、次の記述から読み取れる。

> 或曰 雍本姓耿 幽州人語謂耿爲簡 遂隨音變之
>
> (『三国志』『蜀志』許麋孫簡伊秦伝(簡雍伝))
>
> (私の訳解:幽州人は耿(ケェン:kěŋ か)をカン(kɛŋ か)と発音しているので、発音に従って名を耿雍から簡(カン:kǎn か)雍に改めた)

> 公孫瓚字伯珪 遼西令支人也(註:令音郎定反 支音其兒反)
>
> (『三国志』『魏志』二公孫陶四張伝(公孫瓚伝))
>
> (私の訳解:公孫瓚は遼西令支の出身で、令支は一般的にはレイキと発音するが令支ではレイギと発音する。令支では支の頭子音は gなのでギとなる)

参考までに、耿・簡・支・其・兒の表音を表1に掲げておく。表の見方は次の通りとなる。

(ア) 字列には表音を表したい漢字を記載する
(イ) 上古音・中古音・中世音・現代音の列には、それぞれの時代や表音区分の表音を記載する
(ウ) 拼音の列には、現代音のピンイン表記を記載する
(エ) 呉音・漢音の列には、日本語の音読みを呉音・漢音に分けて記載する
(オ) 万葉仮名の列には、万葉仮名および使用されている書物名を記載する
(カ) 上古音・中古音・中世音・現代音・拼音列における漢語表音の後に片仮名で括弧書きを行っているのは、私が想定する表音である

本論攷では特定の時代の漢語表音に拘らずに漢字の表音を広く掲げる事とし、また参考として上代特殊仮名遣いに加えて日本での音読み・訓読みも交えて掘り下げてみたいと思う。

---

*1 魏晋音と言う名称で区分される事もある。
*2 『邪馬台国の言語』(長田夏樹、学生社、1979年)。

表1　耿,簡,支,其,兒の漢語表音

字	上古音	中古音	中世音	現代音	拼音	呉音	漢音	万葉仮名
耿	kěŋ(ケェン)	kɛŋ(ケン？カン？)	kəŋ(ケン)	kəŋ(ケン)	Gěng (ゲン)	キョウ (キャウ)	コウ (カウ)	該当する表音無し
簡	kăn(カン)	kʌn(カン)	Kian (キェン)	Tšian (ツィェン)	Jiăn (ジィェン)	ケン	カン	該当する表音無し
支	kieg(キェ)	tʃɪě(チエ？シエ？)	tṣï(ツィ)	tṣï(ツィ)	zhī(ジィ)	シ	シ	キ甲類(古事記, 万葉集) ギ甲類(万葉集)
其	gɪəg(ギァ？ギォ？)	gɪei(ギェィ)	k'i(キィ)	ts˘'i(ツィ)	Qí (チィー)	ゴ, ギ	キ	ゴ乙類(万葉集)
兒	ŋieg(ニェ)	niě(rɪě) (ニェ)	rɪ(リ)	rr(ル)	Ér (ィィル)	ニ	ジ	ジ(日本書紀)

3　卑弥呼は漢語で何と訓むのか？

卑弥呼の表音をまとめると、次の表2となる(*1)。

表2　卑弥呼の漢語表音

字	上古音	中古音	中世音	現代音	拼音	呉音	漢音	万葉仮名
卑	Pieg (ピェ)	pię(ピェ)	pi(ピ)	pɔi (ピィ)	Bēi (ベイ)	ヒ	ヒ	ヒ甲類 (日本書紀, 古事記, 万葉集)
彌 (弥)	Miĕr (ミェ)	mię(mbię) (ミェ, ンビェ)	mi(ミ)	mi(ミ)	Mí (ミイ)	ミ	ビ	ミ甲類 (日本書紀, 古事記, 万葉集) ム(日本書紀) ビ甲類(日本書紀)
呼	hag(ハ)	ho(ホ), ɦo(ゥォ)	hu(フ)	hu(フ)	Hū (フゥ)	ク	コ	ヲ(万葉集)

卑弥呼の上古音はpieg-miĕr-hag、中古音は pię-mię-hoとなる。片仮名で書くと上古音はピェミェハ、中古音はピェミェホとなる。

呼字の漢語表音は上古音・中古音・万葉仮名それぞれが別音と言う非常に困ったものであり、どのように訓むのか判断が難しい。中古音の別の説としては、呼字を「を」と訓むものもある(*2)。「を」の発声記号は ɦoと見做すが、この場合は pię-mię-ɦoで、ピェミェゥォとなる。

なお、古代の倭語ではハ行音は存在せず、代わりにファ行音が存在していたと言う見解(*3)もあり、その場合は倭人はピェミェファもしくはピェミェフォに近い倭語を話していたと言う事になる。(続く)

---

*1 彌字の万葉仮名ムは厳密には万葉仮名では無いかも知れない。
*2 『卑弥呼は日本語を話したか 倭人語を「万葉仮名」で解読する』(安本美典、PHP研究所、1991年)。
*3 「国語音韻の変遷」『古代国語の音韻に就いて』(橋本進吉、岩波文庫、1980年)。

大社造り

名古屋市　石田 泉城

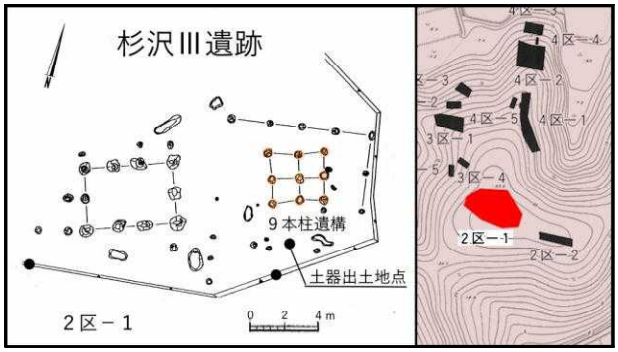
1　大社造り

出雲地方の独特の神社建築様式である「大社造り」は、９本の柱が田の字形に並ぶ高床のいわゆる「九本柱建物」で、切妻造妻入りの社殿構造が主な特徴です。現存する建築では1583年に再建された神魂(かもす)神社本殿が最古とされます。

この大社造りと似た８世紀から９世紀頃と考えられる９本柱構造の建物跡（以下９本柱

遺構）が島根県出雲市の杉沢Ⅲ遺跡や青木遺跡で発見されています。

(1) 杉沢Ⅲ遺跡と田和山遺跡



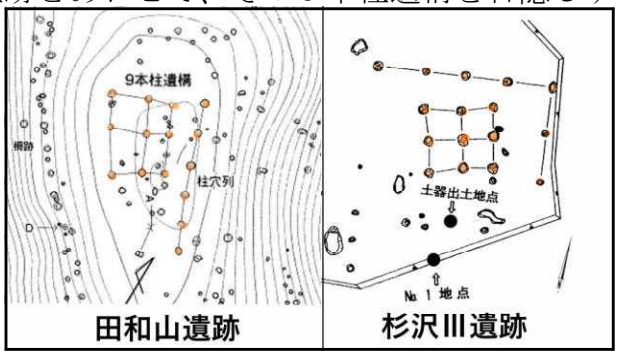
杉沢Ⅲ遺跡では、標高29mの低丘陵尾根上において８世紀後半～９世紀前半頃の建物跡が２棟見つかっており、このうちの１棟は、２間×２間の９本柱遺構でです。この南側約２mの場所からは高杯（口径25cm）の土器と、内面にベンガラが塗られ焼骨片が納められた杯が発見されており、祭祀的な儀礼が考えられる遺構です。

丘陵地帯の山頂にある立地からして一般集落などの建物とは思われず、また、出雲大社の本殿の「九本柱建物」に類似した構造であり、私は、この杉沢Ⅲ遺跡の柱跡は宗教的施設を想起させる遺構と思います。

当該の報告書では、高床倉庫の可能性もあるとされますが、山頂にあるので収納用の施設とは考えにくいでしょう。

田和山遺跡（島根県松江市）の９本柱遺構は、紀元前２世紀から紀元前１世紀ごろの弥生時代のものであり杉沢Ⅲ遺跡とは時期が相当に離れているものの、立地が同じ山頂という場所に築かれている点で共通しています。

さらに、杉沢Ⅲ遺跡と田和山遺跡の同類の柱跡とあわせて、その９本柱遺構を目隠しするように並んだ柱跡の配置状況は酷似しており、このことから両者はともに、神魂神社本殿や出雲大社本殿の「九本柱建物」の構造を持つ宗教的施設の可能性が考えられます。



田和山遺跡は、三重の環濠に囲まれて外部から守られた施設であり、地域において重要な施設であることは間違いがありません。住居は環濠外にあり環濠内に住居はありませんので、守るべき対象は人ではないようです。田和山遺跡の土器は頂部に近いほど出土量が多いため、頂部で用いられた土器が落下したものと考えられます。特に頂部に近い２本の環濠からは、壺が多く見つかっています。

注目されるのは、環壕から出土した出雲型とも呼ばれる銅剣を模した磨製石剣の一部で、これも頂部から落下してきたものと思われ、祭器と考えられます。また、環濠から発見された石鏃は小さく、かつ狭い範囲に限られており、戦闘用では無く儀式用に使われたと思われます。なお、環濠から見つかった3000個以上のつぶて石（投石用の石）は、この施設が外部から襲われたために使われたもので、紀元前１世紀ごろには廃れたと考えられます。

杉沢Ⅲ遺跡は、田和山遺跡より800～900年も後の遺構であるものの、その柱跡は、田和山遺跡の９本柱遺構とよく似ている点が重要です。柱間が一間で同じであり、また、板塀

らしき跡が付属して配置されているところも似ています。

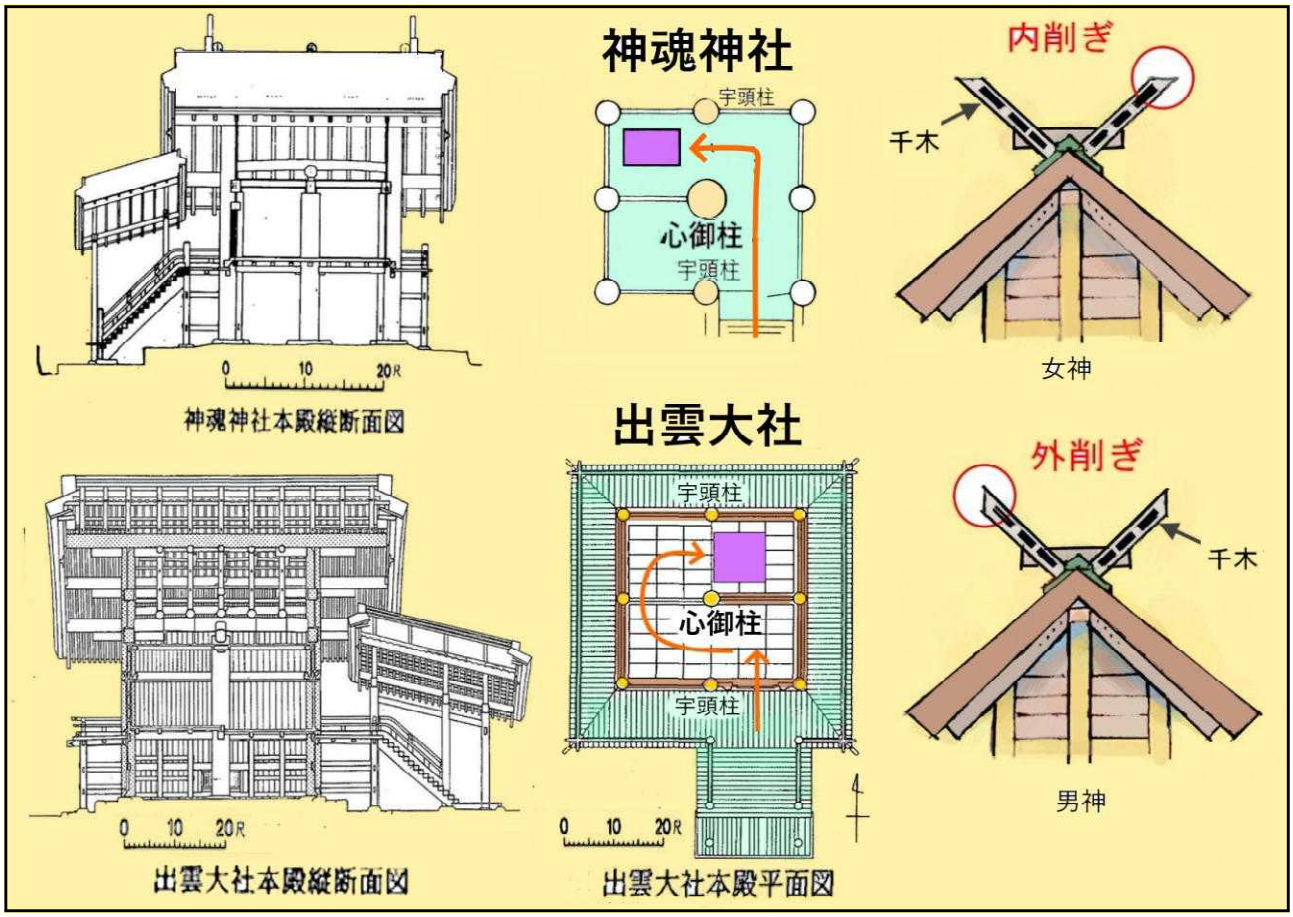
(2) 青木遺跡

青木遺跡からは、８棟の建物跡うち５棟が２間×２間の「九本柱建物」であり、大社造りの神社本殿に類似するもので、また、杉沢Ⅲ遺跡や田和山遺跡の９本柱遺構と似ています。

青木遺跡では、神像、絵馬、社の名が記された木簡などが発掘されており、これらの遺物から「神社」を強く示唆します。

青木遺跡の「九本柱建物」が神社であるとすれば、同時期の杉沢Ⅲ遺跡も祭祀施設である可能性は高まります。また、800年ほど古いですが、紀元前後の田和山遺跡も同様に祭祀施設の可能性があります。

２ 神魂(かもす)神社本殿と出雲大社本殿



神魂神社本殿の外観は、出雲大社と酷似しています。イザナミを祀る女造(めづくり)の神魂神社本殿の柱間は、一間半で三間四方です。これに対して大国主を祀る男造(おづくり)の出雲大社本殿は柱間が三間であり六間四方になっています。つまり、神魂神社本殿の幅や奥行きは出雲大社本殿のちょうど半分の大きさです。内部は、出雲大社と神魂神社はともに後ろ側のひと間が神座になっており、神座の位置は左右逆になります。また、千木が内削ぎと外削ぎと異なるところはありますが、そっくりな外観と言って良いでしょう。田の字の中央の心御柱(しんのみはしら)が「依り代」です。

３　まとめ

「田和山遺跡」、「杉沢Ⅲ遺跡・青木遺跡」、「神魂神社・出雲大社」、それぞれの間を埋める遺構が今後発見されると、私の推測するように田の字の９本柱の構造である「大社造り」の原点が田和山遺跡に繋がることになり、神魂神社や出雲大社の大社造りの祖型が弥生時代にまで遡ることがより一層明確になると思います。

＊＊＊

愛知サマーセミナーのお知らせ

テーマ：教科書が教えない！！真実の古代史「日本の神話」
日　時：2025年**７月１９日（土）１３：１０～１４：３０**（８０分間）
場　所：名古屋学院 中学校・高等学校　１号館２階　Ｃ１０３
会費等：会費無料、参加自由、最大４０名を予定。地下鉄 砂田橋駅で下車。

＊＊＊

■ 前回の会報の目次と話題

・応神天皇の実在性について
　東海市　大島秀雄
・『日本書紀』から『日本後紀』までの六国史を読んで　刈谷市　酒井　誠
・梯儛と卑弥呼は会っている―拝仮は相見を含意する-(2)　吉川市　堀口啓一
・稲荷山・江田船山の両鉄剣と「人制」
　名古屋市　石田泉城
・縄文人と犬　名古屋市　石田泉城

■ 例会の予定

１　日時　令和７年**７月１２日(土)１３時半**
２　場所　名古屋市市政資料館　第４会議室
３　次々回以降の予定
　　8/10、9/21、10/18、11/16

■ 投稿締切り日　６月２４日(火)

送付先　toukaikodai@yahoo.co.jp　石田